平成25年度「報道写真論」講座報告

共催：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

平成23年度から始まった専修大学文学部人文・ジャーナリズム学科での「報道写真論」の講義に、25年度は宮嶋茂樹、樋口健二の両会員に講師をお願いした。

専修大学のジャーナリズム学科開設趣旨は、学生たちの真実を見抜く目を育て、批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者に実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で、何が起きているかを理解してもらうことを方針としている。

この講座には平成23年度は桑原史成、平成24年度は長倉洋海、英伸三氏を派遣し講義を行っていただいた。平成25年度の講義内容のレポートを報告する。教室は川崎市多摩区東三田2-1-1の専修大学生田キャンパス。

●報告：講師・宮嶋茂樹

平成25年4月9日～6月4日

４月９日より６月４日まで毎火曜日、４月23日と30日のゴールデンウィーク期間中を除き計７日、午前中90分間、専修大学文学部、日本語学科の学生、約100名弱、のべ700名弱の受講希望の学生に対して行った。

７回通し、自らが撮影した作品をパソコンを通し、プロジェクターで投影しながら講義した。また参考のため、古典的な報道写真や、国の内外の話題となった作品を作家の写真集より引用し、これらもまたプロジェクターで投影しながら各回１～２点、写真集も各回１～２冊、回覧した。第３回のみ、報道写真の最悪の汚点である、朝日新聞紙面のサンゴ落書写真のみ、紙面をコピーし配付した。

初日は他の先生方との違いを理解してもらうため、現役の週刊誌カメラマン時代の代表作を見せながら、報道写真の活字に対する優越性について講義した。初回より、受講生からの質問を受け付けたが、全くといっていいほど出なかったので、出席表に感想を求めたところ、それらに多数の具体的な、また抽象的で単純な質問が多数寄せられたので、第７回目まで講義の始めに、前回分までに寄せられたそれら質問に回答した。

第２回は取材時に取材対象者もしくは団体企業、組織が設けるハードル、またそれらから受けた取材妨害について、自らの写真を見せながら実際の報道現場の実体と、国内である場合は今の憲法で保障された「表現の自由」について共に考えるよう求めた。

第３回は、報道写真がもたらす影響について、これも、自らの写真が取材対象者などに引きおこしたさまざまな影響や問題を説明し、報道に関わる者の自覚を共に考えるよう求めた。

第４回は受講生のほとんどが20歳前後のため、自らが関わった少年犯罪の現場、取材方法を、自らの作品を見せながら述べ、実名や顔写真の公表の必要性の有無をはじめとしたその問題点、課題を共に考えるよう求めた。

第５回は自らが関わった重大事件や災害などの取材を自らの作品を見せながら、他メディア、テレビ、新聞との報道姿勢、影響力の違いを説明するとともに、新聞社、テレビ局のチーム取材の問題点やフリーランス記者、カメラマンによる個人取材の限界などを忌憚なく述べ、共に考えるよう求めた。特に受講生のほとんどがフリー、社員問わず記者志望なので、技術論でなくその倫理性について、きれいごと抜きで考えるよう求めた。

第６回は受講生のほとんどが関心を持っていたフリーランスの記者、カメラマンの収支面について、自らの経験をもとに、また自らの作品についた金銭的評価について、それら作品を見せながら、認められた経費も含めて説明した。

第７回は最終回のため、それまでに回答できなかった質問も含め回答することに終始した。７回の講義を通しての感想であるが、自らの講師としての才能、資質が全くないことを棚にあげてであるが、一部の受講生を除き、専攻する学問に対する積極性に欠け、記者、カメラマンにとって最も必要な資質とされるあらゆる分野に対する好奇心も極めて希薄と感じた。しかし、これは自らの30年以上前の学生時代との時の違いが大きい要因であろうと考えられた。

プロジェクターを使って講義をする宮嶋茂樹さん　（写真／専修大学提供）

●報告：講師・樋口健二

平成25年6月11日～7月30日

私は、環境問題（自然・人間破壊）を生涯のテーマにして約50年間、追求してきた。日本の経済成長期から今日に至る間の産業公害、労働災害、自然破壊、原発下請け労働者の放射線被曝、隠された悲劇の戦史他、37テーマに及びましたが、専修大の講座は７回でしたので、その一部をピックアップして、パワーポイント（映像）を使用し、学生たちに解説した。その具体的内容を少し触れておく。

私の初仕事「あの世に行けば高い薬はいらない極楽だ」と遺書を残して「四日市公害」に対する抗議の死を選んだ老人が、四日市と私を結びつけてくれた。7年間の取材写真の映像に先ず釘付けとなっていたようだ。同時に「毒ガス島」の話にふれた。四日市公害患者の「わしらと同じ肺機能をやられた患者が広島県にようけ（沢山）いる」という言葉の先に毒ガス棄民の姿があり、隠された毒ガス製造の悲劇を13年間追求した話に衝撃を受けていた。

２回目は石油産業から原子力産業へと移行したので、原発問題の本質に迫るために、原発管理社会の構築と経済構造、さらに原発安全神話をあおった原発５族（政、財、官、学、マスコミ）のシステムを徹底的に解説した。原発の最大のアキレス腱である「原発下請け労働者の放射線被曝」こそ差別構造であり、人海戦術の前近代的労働形態を詳細に話した。

３回目は被曝に苦しむ一人一人を取り上げ、具体的に解明した。それは被曝裁判つぶしや金で裁判をあきらめざるを得なくした実態。20代青年の被曝死は原発社会に未来のない背景を解き明かした。

４回目は原発内部の暗黒労働と台湾の原発被害者の悲惨な現状を白日の下にさらした。被曝労働者50万人に達する現実を直視してくれるよう念願した。

５回目は「南アルプス・スーパー林道」の大破壊と台風によりズタズタ林道は当初の過疎化解消、観光と産業振興という大義名分は何一つ実現しなかった点に触れた。「白神山地」「屋久島」も世界遺産登録以前は皆伐の危機に直面していた裏面史を説明した。

６回目は予定を変更し「富士憧憬」と「日本の街並み」をひもといた。内容が美しい光景と文化財だけに学生たちの表情が変化した。富士山の世界遺産決定直後だけに、ほっとしたと思う。

日本の街並みにも関心が集まったようだ。

重苦しいテーマの後だけに変更した意義があった。今まで、学校では教えない問題だけに私はとてもよかったのではと感じた。

最終回は「石炭産業の鉱内爆発」「労働災害」「捨てられた皇軍兵士」「予備自衛官」にも触れた。「対馬イタイ病」「北海道じん肺禍」。北炭夕張新鉱の粉じん爆発は83人の犠牲者を生んだ。両者とも人災という悲しい結果を招いた。

戦後日本の現代史と私は位置づけた問題でした。国家と大資本が弱者を犠牲にして経済成長を成しとげた日本の裏面史であり民衆史を講義出来たことは感謝にたえません。感謝！！

キャンパスで講義中の樋口健二さん　（写真／専修大学提供）

略歴：宮嶋茂樹（みやじま・しげき）

1961年生まれ。兵庫県明石市出身。日本大学芸術学部写真学科卒業。講談社フライデー編集部専属カメラマンを経てフリーに。主に週刊誌などで活躍し、東京拘置所の麻原彰晃やロシア外遊中の金正日などの姿を捕えたスクープ写真等数多くある。また、世界の災害、紛争地にも出向く。関西弁を用いた文体でルポルタージュやエッセイを数多く執筆。通称「不肖・宮鵤」。

写真集に『不肖・宮嶋 イツデモ ドコデモ ダレトデモ』（小学館）、『不肖・宮嶋誰が為にワシは撮る』（大和書房）、『任務 自衛隊イラク派遣記録』（祥伝社）、『不肖・宮嶋、再び。自衛隊レディース』（イカロス出版）、『不肖・宮嶋inイラク死んでもないのに、カメラを離してしまいました。』（アスコム）他、著書40冊以上。

略歴：樋口健二（ひぐち・けんじ）

1937年長野県富士見町生まれ。東京綜合写真専門学校卒業後、同校助手を経てフリーのフォトジャーナリストとなる。1969年四日市公害を7年間にわたり追い続けた写真展「白い霧とのたたかい」を東京・大阪・四日市・新産業都市で巡回展。1981年から、「原発被曝の実態」の講演を各地で行なう。

1983-84年写真展「毒ガス島」（隠された悲劇の島）を東京・大阪・名古屋、広島・平和記念資料館他で開催。

1974年国連主催世界環境写真コンテスト・プロ部門で『四日市』が入賞。2001年「核のない未来賞」教育部門賞を日本人として初受賞。2011年「第17回平和・協同ジャーナリスト基金賞」大賞を受賞。

『樋口健二報道写真集成日本列島'66～'05』（こぶし書房）ほか、著書・写真集多数。